

総合的な学習の時間 (チャレンジ学習) 部会

司会者 竹中 一三 (旭川市立永山西小学校教諭)

助言者 小野 敦史 (旭川市立千代田小学校校長)

I 授業の部会から ※主なものを抜粋

思考ツールについて

- 今回使った思考ツール (KJ法) は、児童の思考を整理するのに効果的だった。
- 新たな課題を設定するために、ピラミッドチャートを活用していたが、教師のための思考ツールになっていた。今後は、児童が思考ツールを使って意見をまとめる姿が見られるとよい。



単元構成について

- 児童の自然な思考の流れと一致する単元構成や授業の流れがほしい。
- 一次 (日本) → 二次 (日本) → 三次 (外国) ではなく、一次 (日本) → 二次 (外国) → 三次 (日本) という構成の方が、文化のよさや違いを比べられると思った。

本時の流れについて

- 本時の課題が「次の課題を設定しよう。」としたことによって、児童に、本時は課題を設定することが分かってしまっていた。一次を貫く課題を解決することを本時の課題とし、そこで生まれたギャップから二次を貫く課題を作った方が自然だと思う。よって、本時の授業の課題はふさわしくなかったと感じた。
- 前半と後半が分断されている。つながりが薄い。留学生の登場からでも授業を始められた。

ゲストティーチャーについて

- 児童は、留学生から「日本の文化のよさ」について質問されることによって、考えの「ずれ」を感じたり、留学生の気持ちを共感したりしていた。そのことによって、次の探究活動への意欲の高まりにつながっていた。このことから、ゲストティーチャーとして留学生を呼んだことは、効果的だった感じた。
- 緊張からか、児童の考えの「ずれ」への反応が薄かった。心の中では感じていた様子だったので、児童からもっと意見が出たら、「自信をもって日本の文化のよさを答えられない」という新たな気づきを全体で共有できたと思う。

新たな課題設定について

- 外国のことを知りたいと思っている気持ちをどのように日本に引き戻すのかに着目して見ていた。「外国を知るために日本をさらに知る。」という児童からの意見によって、新たな課題設定につながられたのはすばらしかった。
- 新たな課題づくりが(ツールも含めて)前半の流れを受けていなかったように感じた。

Ⅱ 助言者からの講評 ※要点のみ

小野敦史校長先生から

【単元について】

自分の根っ子である日本文化のよさについての考えをもってから、外国の文化のよさを考えるという今回の単元の流れは理に適っていた。

また、日本の文化や外国の文化、外国の特徴を出し合うことから単元をスタートさせていたところもよい。既知っていることを出し合えば、当然、主体的に学びに向かうし、各自のエピソード、経験などが語られ、対話的になる。そして、互いの知識がすり合わされて、よく知っていると思いついでいることが揺らいできて、調べてみたい、分かりたいという意欲につながっていく。今回の単元構成から、このような導入もあることを学んだ。

総合的な学習の時間では、単元を通して、個々のものの見方である「観」を育てることが大切である。そこで、大切なのは、やはり教師の「文化観」である。教師が、日本文化のよさをどのようにとらえているのか、ということである。よさといってもたくさん考えられる。「～道」といって、修行し人格の向上を目指す精神性なのか、黒船来航から2年余りで、蒸気船を造り上げるような物づくりの技術、はたまた異文化を飲み込む懐の深さか。どんなに素晴らしい児童であっても、教師の「観」は超えられないし、また、児童にそうやすやすと超えられる見方では、寂しい。教師が広く深い文化観をもつことで、児童の学びに寄り添うことができると考える。

【深い学びについて】

主体的・対話的な学びは、まだイメージがわくが、深い学びと考えると、難しい。「深い学び」とは、「浅くない学びだ」と考えればよい。「これが深い学び」というと、ピンポイントで受け取り、排他性をもちかねない。深い学びの方向性は多様であり、深さ的にも底はない。更に、深い学びを実現する方法や手立ては、無数に存在する。

この単元では茶道や和室などを調べることで、それらは、日本の文化のよさの多様な表れであることに気付き、児童がそれまで調べたことを俯瞰的に眺め、それらを統合することで自分の「文化観」を形成していく。このことは、中教審答申で述べられている『各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら知識を相互に関連付けてより深く理解する』を意味している。よって、この単元は、間違いなく深い学びといえる。

【思考ツールについて】

過去の自分の作文指導を振り返ると「よく見て書きなさい。」「よく考えて書きなさい。」という無茶な言葉を使っていた。当然、この指示で書けるようになる児童はいない。具体的に、どのようにすることが「よく見る」ことであり「よく考える」ことであるのかという、心的操作の方法を教えていないのだから、できるようにならないのは当然である。だから、「比較」「分類」「関連付け」などのものの「見方・考え方」を身に付けていくためには、この学級の児童のように思考ツールを使いこなし、「思考スキル」を身に付けることが重要である。このようなスキルを身に付けているのは、他の教科でも思考ツールが活用されているからだと思う。今後、鍛えられた児童は、「ツール」がなくても、「比較」「分類」「関連付け」などの思考ができるようになっていくと思う。

